

管内と畜場で認められた牛の全身性腫瘍症例について

千葉県南総食肉衛生検査所

宮木尚子 山田裕康 樋泉 礎 岩沢俊一

千葉県東総食肉衛生検査所

丸ひろみ 小野健司 片山雅一 川合ちず子

1 はじめに

と畜検査では様々な疾病が発見され、と畜場法に基づき、疾病によっては全部廃棄、一部廃棄の措置が取られている。このうち腫瘍について着目すると、平成16年度には51頭、平成17年度では63頭の牛が全身性腫瘍として全部廃棄されている。南総食肉衛生検査所の管轄すると畜場（以下、管内と畜場）は、県下で唯一、乳廃用牛を処理しているため、県内における乳廃用牛の腫瘍の状況把握が可能と考えられる。今回、全身性腫瘍として廃棄される腫瘍は病理学的にどのような腫瘍に分類されるのか調査したところ、若干の知見を得たので報告する。

2 材料および方法

平成18年1月から平成18年7月まで（4月を除く）の6ヶ月間に管内と畜場で全身性腫瘍として全部廃棄されたもののうち、採材可能であった37例について、腫瘍化した臓器および腫瘍浸潤部位等を採材した。そのうち血液採取が可能であった26例については、心残血もしくは腋下静脈等から血液採取を行った。

1) 病理組織学的検索

腫瘍組織は、10%ホルマリンで固定後、定法に従い包埋・薄切し、ヘマトキシリン・エオジン（HE）染色、一部にメチルGピロニン染色をし、病理組織学的診断を行った。

2) 血清学的検索

腫瘍牛26例の採取した血液は、血清を分離し、牛白血病抗体アッセイキット「日生源」を用いて、牛白血病ウイルス（BLV）に対する凝集抗体の検出を行った。

3 結果

生体検査時には4例が外貌から腫瘤や眼球突出等の異常を認め、13例が起立不能のために病畜として搬入された。残りの21例は生体検査時には著変は認められなかった。多くの症例で内臓検査時に腸間膜リンパ節の腫瘍化が認められ、腎臓周囲、心耳および心筋に腫瘍が好発していた。腫瘍の剖面は膨隆し、白色不透明、充実性であるものがほとんどであり、境界は不明瞭、腫瘍塊周囲への浸潤も認められた。病理学的検索では、37例中34例の症例でリンパ球の集簇と組織への浸潤の組織像からリンパ腫とし牛白血病と診断した。残りの3例は、形質細胞腫、腎癌（尿細管由来）、肺の慢性炎症を伴った敗血症と診断された。血清学的検索では、26頭中24頭でBLV抗体陽性であった。病理でリンパ腫と診断された症例全てにおいてBLV抗体陽性となったが、形質細胞腫と診断された症例もBLV抗体陽性であった。

4 考察

今回調査した全身性腫瘍として全部廃棄されたもののほとんどは、牛白血病であった。全身性腫瘍として全部廃棄されたものが年々増えてきていること、BLV抗体が高率に検出されたことから、県内に牛白血病、特にBLVが広まっていると考えられた。